

メランコリアとアマツオーネ(1)

河内信弘

はじめに

本稿は、ニーチェが一八七一年夏に作った二篇の詩を翻訳し、訳註を加え、その後この二篇を中心におき、ニーチェのドイツからギリシャへの道を検討するものである。

その二篇は、デューラーの「メランコリア1」をもとにして作られた「An die Melancholie」, „Nach einem nächtlichen Gewitter“である。

一 翻訳ならびに訳註

メランコリア 憂鬱に寄す

メランコリア
憂鬱よ 悪くとつてくださるな

御身讚えんと 鷲毛ハシを削り

頭たれ 切株に腰おろすも

隠者のごとくなきことを。

いつにまして昨日 御身はかく私を見たもうた

熱き太陽 朝の光のなかで。

貪欲に叫ぶ禿鷹の声は 谷に つき刺り

禿鷹は 死の曝し杭に 死肉を夢見る。

呪わしき鳥よ おまえは見迷った この身

切株にねむる木乃伊のごとくあろうとも。

目を見落した 喜びに満ち なおここそこと

誇らかに 意気高く投ずる目を。

遠き雲の波までは力なく

おまえの高処には忍び寄れずとも

この目は それだけ深く 己のなかに

存在の深淵に 稲妻となつて 光を投じていた。

かく坐ることいくたび 深き荒野に

醜く身をこごめ 生贄捧ぐる野蛮人バルバロイのごとく

メランコリア
憂鬱よ 御身に私は思いをこめた

若かろうと 私は罪をあがなう者。

かく坐りつつ 禿鷹の飛翔を

雪崩落下の轟を私は楽しみ

人のなす虚構あたわず 御身は私に

あるがままに語りたもう おそろしく厳しき顔もて。

怒れる 岩の性持つ苛酷な女神

御身友として好んで私の傍にあらわれたもう

威嚇しつつ 私に見せてくださる

禿鷹の飛跡 私を無にせんとする雪崩の欲情。

あたりに息づく 歯をむきだしての殺意の情欲

これは滅びゆかんとする 苦悩に満ちたる渴望。

高き岩場で誘いつつ

蝶を 花は 恋求めている。

これはことごとく私——おのきながら追感する——

孤独な花 誘われし蝶

禿鷹 急なす氷河

激情の呻き——すべて御身の誉のために

憤怒の女神よ 御身に深く腰をかかめ

頭たれ おそろしき頌歌を吟く

ひたすら御身の誉のために そしてひたすらに

生を 生を 生をもとめて喘ぐ。

おぞましき神よ 私を悪くとってくださいるな
韻をふみ 優雅に御身つつむを。

御身おそろしき顔にも近づけば 人はおびえ

御身おぞましき右手を差しだせば 人は震える。

震えつつ ここに口ごもり言葉に言葉を重ね

しらべ持ち姿をあらわしたるものに この身は疼く、

墨は流れ、鋭き鷲毛は走る——

さあ 女神よ 女神よ わが ままに ままにさせたまえ。

ギムメルヴァルト（一八七一年夏）

An die Melancholie.

Verarge mir es nicht, Melancholie,*

Daß ich die Feder, dich zu preisen, spitze,

Und daß ich nicht, den Kopf gebeugt zum Knie,

Einsiedlerisch auf einem Baumstumpf sitze.*

So sahst du oft mich, gestern noch zumal,

In heißer Sonne morgendlichem Strahle.*

Begehrlich schrie der Geyer in das Thal,

Er träumt vom todtten Aas auf todttem Pfahle.*

Du irrtest, wüster Vogel, ob ich gleich		Rings sthmet zähnefletschend Mordgelüst :	
So mumienhaft auf meinem Klotze ruhte !	10	Qualvolle Gier, sich Leben zu erzwingen !*	30
Du sahst das Auge nicht, das wonnereich		Verführeisch auf starrem Felsgerüst	
Noch hin und her rollt, stolz und hochgenuthe.		Sehnt sich die Blume dort nach Schmetterlingen.	
Und wenn es nicht zu deinen Höhen schlich,			
Erstorben für die fernsten Wolkenwellen,		Dies Alles bin ich—schaudernd fühl' ich's nach—	
So sank es um so tiefer, um in sich	15	Verführter Schmetterling, einsame Blume,	
Des Daseins Abgrund blitzend aufzuhellen.		Der Geyer and der jähre Eisesbach,	35
		Des Sturmes Stöhnen—alles dir zum Ruhme,	
So saß ich oft, in tiefer Wüstenei		Du grimme Göttin, der ich tief gebückt,	
Unschön gekrümmt, gleich opfernden Barbaren,*		Den Kopf am Knie, ein schaurig Loblied ächze,	
Und Deiner eingedenk, Melancholei,		Nur dir zum Ruhme, daß ich unverrückt	
Ein Büsser, ob in jugendlichen Jahren !*	20	Nach Leben, Leben, Leben lechze !	40
So sitzend freut' ich mich des Geyer-Flugs,		Verarge mir es, böse Gottheit, nicht,	
Des Donnerlaufs der rollenden Lawinen,		Daß ich mit Reimen zierlich dich umflechte.	
Du sprachst zu mir, unfähig Menschentrugs,*		Der zittert, dem du nahest, ein Schreckgesicht,	
Wahrhaftig doch mit schrecklich strengen Mienen.*		Der zuckt, dem du sie reichst, die böse Rechte.	
Du herbe Göttin wilder Felsenatur,	25	Und zitternd stammle ich hier Lied anf Lied,	45
Du Freundin liebtest es nah mir zu erscheinen ;		Und zucke auf in rhythmischem Gestalten :	
Du zeigst mir drohend dann des Geysers Spur		Die Tinte fleußt, die spitze Feder sprüht—	
Und der Lawine Lust, mich zu verneinen.		Nun Göttin, Göttin laß mich—laß mich schalten !*	

Gimmelwald.

(Sommer 1871).

《訳註》

註の位置は原文に*を付し、註番号はつけない。訳註番号の下のカッコ内は詩の行数を示す。

1(1) ニーチェがこの詩を作るきっかけとなったデュラーの „Melencolia I.“ は、次のようなものである。図版の代りに解説を引用しておくたい。

「見張りの塔を想わせる四角の建物を背に、水芹みずせりの冠をつけた、大きな翼のある人物が、左を向いて石段に腰を下している。彼女は右手に大きなコンパスをもち、左手に膝を立てて頬杖をつき、両眼を見開いて沈思に耽っている。彼女の周囲にはさまざまのものが雑然と置かれ、足許に一頭の短い毛の犬が身をまろめてまどろんでいる。画面中央の建物に寄せて立てかけられた挽臼の縁には、布を敷いて小さな天童（キューピッド）が腰をかけ、書き板に何かを彫りつけている。犬の前には円球が転がり、そのまわりには墨壺や筆入れ、定規、かな、やつとこなど、さらに鋸や釘やふいこの物などもみえる。背景は静かな海となり、岸には建物や船、そして遠くには空にかかる虹を貫いて落ちる大きな彗星の放つ怪しい白光に照らされて、明るく浮び上がった山が見える。時は夜である。蝙蝠に似たバジリスクが『メレンコリア1』と書いた銘文を両手に提げて、夜空を飛んでいる。」（前川誠郎解説『デューラー版画集』 日本経済新聞社 一九七三年）

こうしてみると、ニーチェは „Melencolia I.“ にもとづいて詩を作っているが、画題に忠実というのではない。画中のキューピッドも、犬も蝙蝠に似たバジリスクも登場しない。バジリスクに代り禿鷹が詩に登場する。背景は海に代り、谷になる。この詩を作った場所であるギンメルヴァルトの谷からの連想であらうか。

メランコリアの目と相對して、ニーチェはこの詩を作ったと言つてよいであらう。（なお、ニーチェの頃にはすでに『メレンコリアエ』の画中に描かれた様々のものを持つ意味は理解されなくなつていた。）その目の持つものは、芸術家の、創造する人間の憂鬱であると言われている。憂鬱と創造が深く結びあわされ、表現されているのである。憂鬱（メランコリア）氣質は中世の価値観のなかで最も悪しき氣質と考えられており、その氣質を支配する土星が、古代ローマの農耕神サトルヌス、ギリシャにおけるクロノスと深く結びつけられて考えられていた。そのクロノスは非ギリシャ的な存在である。

「クロノスの崇拜はオリュムピアでは独立の神官団と犠牲とを有し、アテーナイその他でも彼の祭が収穫時に行なわれ、この日には主人も奴隸も平等に無礼講で宴を張つた。また彼の父に対する遺り方もギリシャ的でない。彼はおそらくギリシャ先住民族の（おそらく農業豊穡の）神で、オリュムピアでの崇拜や、歴史時代にも残っていた人身御供などは、そのことを示している。」（『ギリシャ・ローマ神話辞典』高津春繁著、岩波書店、一九七五年）

メランコリアに象徴されるものが、その内に、キリスト教に対しては異端的要素を、ギリシャの世界に対してはバルバロイの要素を含んでいることは、まことに興味深い。

2(4) メレコリアは石段に、ニーチェは切り株に坐る。共に物想いふける姿は変わらないと言えよう。

「頭を片手にもたせかける古来の身振りが、ここではメランコリアの最重要の属性とされている。倦怠と悲哀を表わしてきたこの身振りが、デュラーによって創造的思索の表現に高められたのである。」（『デュラー版画展図録』西武美術館、朝日新聞社編、西武美術館一九八〇年）

その関連の有無などは別として、ロダンの「考える人」が想起される。その関連の有無などは別として、ロダンの「考える人」が想起される。メレコリアが夜に坐るに對して、ニーチェは朝の光のなかに坐る。ニーチェはこの時二十七歳、翌年には『悲劇の誕生』が公刊される。

3(6) メレコリアが夜に坐るに對して、ニーチェは朝の光のなかに坐る。ニーチェはこの時二十七歳、翌年には『悲劇の誕生』が公刊される。

4(7) ギリシャ神話におけるプロメテウスと禿鷹が想起される。

「彼(ゼウス……筆者)は策略に長けたプロメテウスを脱れもならぬ、冷酷な桎で縛りつけた、柱の真中に(桎を)打ち込んで。そして彼に長い翼の鷲をけしかけた。(鷲は)彼の不滅の肝臓を喰うのだったが、肝臓は夜のまに長い翼の鳥が終日貪り喰ったのと同じ分量だけ生え出るのであった。」(『ギリシャ思想家集』の内ヘシオドス『神統記』広川洋一訳 筑摩書房 昭和四十年 十四頁)

『悲劇の誕生』においては、アイスキュロスの『プロメテウス』が論じられる。cf. „Nietzsche Werke III, Kritische Gesamtausgabe“ Hrsg. Von G. Colli und M. Montinari, W. de Gruyter, 1972 S. 60~67.

一八七四年の終りの断片には「プロメテウスとその禿鷹は、オリンピアの古代世界とその力が否定されたとき、忘れられていった」ではじまる数ページがある。(„Nietzsche Werke III 4, W. de Gruyter 1972 S. 461~463)

5(8) 註4で引用したが、柱の真中にプロメテウスを桎に縛りつけたという一節からの連想であろうか？

6(18) Barbar (野蛮人)はギリシャ語の barbaros に由来する。バルバロスはギリシャ人以外を意味する。この場合、メランコリアはギリシャの神ではないのだから問題にすべきものとは表面的に思われぬ。しかし註でみたごとく、このバルバロイの一語に実に興味深いものを読みとることができる。

デューラーの描いた「メレンコリア」には、それ以前の劣等の氣質をあらわすものぐさと思鈍そのものを表わすメラロリーではなく、精神的悲劇としてのメランコリーが表現されている。それは新プラトニ主義哲学者 M. Ficino、モララ哲学者 Heinrich von Gent、C. Agrippa von Nettesheim の『神秘哲学』(一五二〇年)を経ての結果である。(E. Panofsky: *Leben und Kunst Albrecht Dürers*, übersetzt von L. L. Möller, R. & Bernhard, 4 auf. 1955. S. 177~229) デューラーが自らを土星(サトゥルヌス)の支配を受ける憂鬱

質であると信じてことを重ね合せると、その土星を介してローマ、(農耕神サティルヌス)、ギリシャ(クロノス……クロノスの姿は通例老人で重々し様相の幽鬱な表情)『ギリシャ神話』呉茂一著 新潮社 昭和四十九年 二五頁)をしている)そしてギリシャ以前へと(註1参照)と連なっていく。

一方では、『騎士と死神と悪魔』『書斎の聖ヒエロニムス』を合せた、この『メレンコリアエ』がドイツ的ゲミュートを表現し得え、好まれた作品である。ここに、デューラーを通してのドイツ人の北方と南方の問題が集約されている。

ニーチェがこの詩に於て、メランコリアに向って、自らをバルバロイの如くと表現していることは、以上を念頭におくと興味深い。ニーチェはキリスト教に対しては異端であり、ギリシャに対しては、ある意味でバルバロイである。『メレンコリア』もまた、ギリシャ以前にさかのぼるバルバロイ的なものと、宗教改革へと連なる北方の異端的要素をその奥に秘めているといえる。

7(20) > Du hast gerufen—Herr, ich komme (1862) から(第二節前半部)

私は墮落してしまいました

酔って

落ちて

地獄と苦悩に選ばれたのです。

Ich war verloren,

taumeltrunken

versunken,

Zur Hölle und Qual erkoren.

十代後半のニーチェの苦悩が響き出てくるが、およそ十年後にも、その苦悩の響きがニーチェの底にあると言えよう。しかし、若いからこそ、若いからこそ、自らを贖罪者 Biber と見る純粹さを持ちち

るのではないか。

また一八八六年の ‚Versuch einer Selbstkritik‘ のなかに次の文章がある。

„Gibt es vielleicht—eine Frage für Irrenärzte—Neurosen der Gesundheit? der Volks-Jugend und Jugendlichkeit?“ (Nietzsche Werke III, S. 31)

およそへ 一個人にめてはめても、これはよと思われ。

9(23) „Die Geburt der Tragödie“ (Nietzsche Werke III, S. 31) の一節から。

「今や我々の前にはいわばオリュンポスの魔の山がひらかれ、その根底がしめされる。ギリシヤ人は存在の恐ろしさと途方もなきことを知り、また感じていたのである。およそ生きてゆくことができるためには、ギリシヤ人はその前にオリュンポス神族という輝く夢の所産を置かねばならなかった。」

けれど、„Jeder das Pathos der Wahrheit“ (Nietzsche Werke III 2 S. 253~254) を重ねると、『悲劇の誕生』の引用したこの一節は、ニーチェの世界と人間理解と深い係りがある。つまり人間は芸術的・中間世界 Mittelwelt によって生を可能なものとする。それが Menschentum と考えられる。

9(24) デューラーの「メレコリア」の表情は厳しい。精神的労働にたずさわるものの憂鬱の表情は、シレノスに連なる存在の根底、無を伝えるものの表情の厳しさに転ぜられているようである。

10(30) 註9参照 さらにシレノスの知恵(『悲劇の誕生』第三章・第四章)の言及のうち、次を参照

„Das allerbeste ist für dich gänzlich unerreichbar: nicht geboren zu sein, nicht zu sein, nichts zu sein. Das Zweitbeste aber ist für dich—bald zu sterben.“

(最も良いことは、おまえにとって全く達しえないこと、つまり、生れなかったこと、存在しないこと、無であること、である。第二に良いことは、しかし、おまえにとつては——間もなく死ぬことである。)

9(25) の奥に „Ueber das Pathos der Wahrheit“ (1872年) の

次の一節を重なてみよう。「無数の太陽系のなかでさまざまと光を放ちながら作られた宇宙の遠き片隅のどこかに、かつて一つの星があった。その星で賢い動物が認識を発見した。それは宇宙の歴史において不遜極くない、また最もでたらめな瞬間であったが、ほんの一瞬のことすぎなかった。自然の二三呼吸の後で、その星は凝固し、賢い動物は死なねばならなかった。(Nach wenigen Athembzügen der Natur erstarrte das Gestern, und die Klugen Thiere mußten sterben.)」(Nietzsche Werke III 2, S. 253~254)

こうしてみると、ニーチェはシレノスの知恵の背後に、更に地球そのものの、自然そのものの亡びへ向う動きを見つめていたことにな。二十九行目 Mordgelüst は単に mich zu vernichten だけでなく、存在そのものの亡びへ向う(亡びへの意志、渴望 Gier, Lust)姿をみつけたと思われ。それが Qualvolle Gier, sich Leben zu erzwingen という表現になったのではなからうか。

11(32) 亡びへと向うなかにあって花というもの(何故 Blume にかかる冠詞が不定冠詞ではなく定冠詞なのか現段階における筆者の解釈である)が咲く。花は自己を結実させるためには蝶を必要とし、求め、(sich sehen) するためには誘惑 (verführerisch) しなければならぬ。花が生を象徴しているとすれば、蝶は生を可能にする芸術とでも言えようか。それとも一個の花しか咲いていなかったであろうか。

12(40) „Nach Leben, Leben, Leben lechze“ 生を求めたいが、自己の内 in sich 存在の深淵 des Daseins Abgrund (十五~十六行) に沈むことよって、生れでてくることは注意しておかなければならぬ。

13(42) 次の43~44行で分るように、(註9も参照) 存在を否定する“女神”に存在を主張し、それによって“女神”を讃えようとする。争うこと(争うこと)の出来ぬ神性に争ふので、この様な表現が生れるのであろう。

14(46) 45~46のために、ニーチェが『悲劇の誕生』の第五章において、抒情詩人とは如何なるものかを述べているが、重要な点を要約すると、

およそ次のようになる。抒情詩人はディオニュソスの芸術家として、根源的一者と一つになり、根源的一者の苦痛と矛盾となる。自己を棄てたその状態から生れでてくるものが、音楽であり、抒情詩である。抒情詩人が『私』を歌うとき、その『私』はいわゆる『私』ではなく、真に存在する唯一の永遠の自我であり、事物の根底に根をすえた自我であり、様々の姿を通して得られるものなのである。

15(48) „nich“ „ich“ は註14におけるごとき『私』と取るべきであろう。

夜の嵐が去って

今日 御身 陰鬱の女神よ

霧のヴェールとなりて わが窓辺にかかりたもう。

不気味に蒼白の泡沫がとび

不気味に あふれたる溪流が その奥に鳴る。

ああ 御身 稲妻一閃のもと

雷鳴の抑えをしらぬ轟きのもと

谷の瘴気のもと 毒を含む

死の飲ものを 御身魔女よ 醸しだしたもうた。

慄えつつ 幾夜中 私は

御身の声にこもる快樂と悲嘆の頻りなるを聞いたことか

御身の眸の煌きを 御身の右の手の

鋭く打ちおろされた稲妻の楔を見たことか。

かくして御身はわが寂寥の床に歩みより

武装に身を整え その武具は輝く

青銅の鎖もて窓を打ち われに語る

『さあ 聞くがよい 私が何者であるか

『偉大なる永遠のアマツォーネ

『女にあらざ 鳩のごとくにあらざ 軟弱にあらざ

『男への憎悪と侮蔑を抱く女の戦士

『勝利者にして女の虎。』

『私が歩めば あたりに死体が散り

『わが眸に燃ゆる憤怒は松明をなげ

『わが脳髓は毒を思う——さあひびきまげ、祈れ。』

『さもなくば うじ虫よ 鬼火よ 消えてゆけ。』

Nach einem nächtlichen Gewitter.

Heute hängst* du dich als Nebelhülle,

Trübe Göttin, um mein Fenster hin.

Schaurig weht der bleichen Flocken Fülle,*

Schaurig tönt der volle Bach darin.

Ach ! Du hast bei jähem Blitzeleuchten,

Bei des Donners ungezähmten Laut,

Bei des Thales Dampf den giftfeuchten

Todestrank, du Zeberin, gebraut !

Schauernd hörte ich um Mitternächten

Deiner Stimme Lust- und Wehgeheul,*

Sah der Augen Blinken, sah der Rechten

Schneidig hingezückten Donnerkeil.

Und so tratst du an mein oedes Bette

Vollgerüstet, waffengleißend hin,

Schlugst an's Fenster mir mit erz'ner Kette,

Sprachst zu mir : „Nun höre, was ich bin !

„Bin die große ewge Amazone,*

„Nimmer weiblich, taubenhaft und weich

„Kämpferin mit Manneshaß und -Hohne

„Siegerin und Tigerin zugleich !

„Rings zu Leichen tret' ich, was ich trete,

„Fackeln schleudert meiner Augen Grimm

„Gifte denkt mein Hirn — nun kniee ! Bete !*

„Oder modre Wurm ! Irrlicht, verglimm !“

《註》

1(1) *hinhängen* は「やじを掛ける」であるから、「メンロリブ」の銅版画が掛つたのであらう。それとかけ「*hinhängen*」を使ったと想像される。

2(3) 1行目の *Nebel hülle* の *Hülle* と *Fülle* は韻の関係だけなく、意味の上で関連がある。die *Hülle* und *Fülle* : 本来は体を包むものと腹を充たすもの、衣服と食物の意から、後にあり余るほどたくさんとの意となる。翻訳不可能な言葉の遊びと同時に、*Nebel* と合わせ *hinhängen* の意味の補充となつてゐる。

3(10) 5〜10行までのために、『悲劇の誕生』の二節から、「情欲と残酷さからなる、あのいとわしい魔女の飲物 (*Hexentrunk*) はここでは力になかった。ディオニユリス祭の熱狂者達の激情のなかにある異常な混合と二重性だけが、魔女の飲物を思い出させるのである。その混合と二重性とは——薬が死に到らしめる毒を思い起させるように——苦痛が快楽を呼び起して *das Schmerzen Lust erwecken* 歓喜が胸のうちより非痛な声を引き出す現象である。」
Lust- und Wehgeheul は一見、正反対と思えるが、その根底は同じところにある。

ニーチェの妹は、今問題としてゐる二篇の詩が作られたときのことを次のように述べてゐる。(『*Begegnungen mit Nietzsche*』 hrsg. S. L. Gilman, H. Grundmann, 1981. S. 166~167)

「兄のたつての願いでゲルストルフがやってくることになりました。私達はゲルストルフと一緒に、ミュンヘンに近いギムメルバルトで、素

5

10

15

20

晴らしい時を過したのです。フリッツは大変幸せでした。それというもほとんど五年振りの再会でしたし、以前と同じようにゲルスドルフと心の中の結びついており、あらゆる大きな目標において一体であることを感じたからです。この時を実際に心から楽しんでいて一方で、フリッツはメランコリアに寄せる二篇の詩を作ったのですが、これは私にはまことに「ドイツ的」に思われのです。」

4(17) ドイツ的心情を表現したデューラーの「メランコリア」が、ギリシヤに連なる「アマツォーネ」と、しかも *ewig* の形容詞を付加され、表現されている。

メラコリアをアマツォーネと、なぜニーチェは言ったのであろうか。ここではアマツォーネの存在を(メラコリアに関して)『憂鬱に寄す』の註1参照)考えてみよう。「アマゾンとは世界の周辺(おそらく東の方、小アジアの奥か)アポロドーロスでは、テルモドーン河の流域に居住する民族で、武神アレースの裔といわれ、婦人ばかりから成っていた。そして戦争と狩猟を日常の仕事として、そのため武器(大方は弓と三日月形の楯、時には槍や斧、スキタイ人のように)の使用に邪魔をせぬよう、右の乳房を取り除く、また種族保持のためには、一年に時を定めて近隣の種族の男と交わり、生れた子は女兒ばかりを育て、男児を殺すか、能力をなくすといわれた。おそらくは旅行者の空想談か、もし事実の影があるとすれば、はるかな東北方の遊牧民で、長髪をもち髻ひげの少ない人種の観察に基づくものかも知れない、あるいはその風説であろう。ギリシヤの伝説には、ヘーラクレスのほか、テーセウス伝にも著しく現われ、彼の妻でヒッポリュトスの生母は、アマゾンといわれている。しかしもともと空想的なギリシヤ人の嗜好を大いに刺激したと見え、美術などでもしばしばそのモチーフが使用されている。」(『ギリシヤ神話』 呉茂一著、新潮社。昭和四十九年、三二八頁)

アレースは、ギリシヤ人に戦や軍事の時に代名詞的に使われるにもかかわらず、伝説では不名誉な役割を引き受けていることが多い。彼の本拠は北方のトラキア地方らしく、生粋のギリシヤ神ではなかつた。

た。(『ギリシヤ神話』一四〇〜一四二頁を要約)

ヘロドトスの『歴史』(青木巖訳 新潮社、二六〇頁)によれば、「スキタイ人はアマゾンの事をオイオルパダと呼んでいるが、この名称はギリシヤ語で言えば、オイオルというの男を意味し、パタというの殺す事を意味するから、男殺しという意味を持っている。」

メランコリアがクロノスに連なる(ローマではこの神の該当者がなく、農業神のサートウルヌスをクロノスに結びつけていた)。そのクロノスは父ウーラノスの一物を大鎌をもって切り落とし、海に抛りなげ、それからアプロディーテーが生れる。そのアプロディーテーとアレースは、有史時代のギリシヤ諸都市で、夫婦一対の神格とされたのである。

メランコリアはクロノスを通りしてアプロディーテーに、アマツォーネはアレースに結びついてゆく。メランコリアとアマツォーネはその起源において深い結びつきを持っているわけである。しかもギリシヤ神話に取り入れられたとしてもアマツォーネはバルバロイの要素を強く保っているといえる。またメランコリアも異端的要素を深く持っている。

5(23) 『憂鬱に寄す』註9参照 存在の否定(この行の *Gifte* つまり死に至らしめるもの)のなから、生が生れてくると言えよう。そこから逃がれることからは生は生れない。*Deien* は存在の否定のなから、生の生れることを祈ることに他ならないであろう。

なお使用テキスト、引用文献は文中に示したので、特に記さない。

翻訳にあたり参考にしたものは次の通り。

『ニーチェ全詩集』 秋山英夫、富岡近雄訳 人文書院 昭和四十七年

世界の詩四十一

『ニーチェ詩集』 浅井真男訳 彌生書房 昭和五十五年

追記

訳註をつけることを、全く手操りで行っております。誤りも犯していることと思しますので、御教示いただければ幸甚に存じます。